

Title	The green knightとThe beheading game : 中世ロマネスク文学の構成
Sub Title	The Green Kight and the Beheading Game. : the structure of Medieval Romanesque literature
Author	池上, 忠弘(Ikegami, Tadahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.11, (1961. 1) ,p.137(14)- 150(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00110001-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Green Knight と The Beheading Game

——中世ロマネスク文学の構成——

池 上 忠 弘

Sir Gawain and the Green Knight (以下 *SGGK* と略す) は MS に記されて¹⁾以後長いこと人の目に触れなかったが、1839 年 Sir Frederick Madden の edition²⁾によって初めて公表され、ついでフランスの中世学者 Gaston Paris の「中世英文学の宝石」という賞讃を得てから俄かに問題の作品となり、比較文学の恰好の題材として多くの学者達の研究対象となって各方面に亘る研究がなされ、今日優れた校訂本を二冊持つに至っている³⁾。研究の結果は細かい点まで明らかにされているが、それでもなおいまだ未解決の問題を沢山残している中でも、source⁴⁾及び語彙に関する面では優れた研究が発表されて、この作品の持つ意義をどしどし解明することによって一層作品の価値が高まって行くばかりである。*Gawain-Poet* を 14 世紀英文学を代表するものとして Chaucer, Langland と並べてみても遜色がないであろう。

SGGK は Beheading Game (或は Challenge) (以下 BG と略す) と Temptation (以下 T と略す) の二つの主題から出来上っていることは広く承認されている⁵⁾。(これに両者を結付ける Exchange of Winnings⁶⁾ というもう一つのテーマを加えてもよいと思う) とともに試練の物語で、一方は勇氣と誓言の厳守、他方は純潔と約束の厳守を提示している⁷⁾。後者については Courtly Love の伝統に関連付けて既に概略触れたことがあるので今回の問題から外し、前者のテーマに視点を集中してその局面からこの物語の性質を考察してみたいと思う。これは同時に、当然主人公 Gawain の見事な antagonist を演ずる the Green Knight (以下 GK と略す) をも問題とすることになるので合わせ考えてみたい。現代人の好みから云うと、そして作者自身の興味と努力もそこに向けられているのだが、男女の人間的關係を取扱いこの物語の半分以上を占めている第二の主題に引きずられ強い興味を抱かせるのであるが、BG の考察はこの物語の持つもう一方の古風な要素を明らかにしてくれるであろう。

(I)

まず始めに GK がどういう風に登場し、どういう役割を果たしたか、この物語について見てみよう。

作者は聴衆によびかける convention に従って、“⁸⁾pis laye”(l. 30) を次のような物語として語り始める。

an aunter in erde I attle to schawe,
pat a selly in sizt summe men hit holden,
& an outrage awenture of Arthure; wondere; (ll. 27-29)

宮廷のよく開かれる Camelot で1月1日並びなき王 Arthur が Christmastide の祝宴を張って、人々が高らかに鳴りわたる 楽の調べと共に今まさに配膳された first course に手をつけようとした時、突然巨大な騎士が馬に跨ったままこの王廷の中に乗りこんで来た。

per hales in at þe halle dor an aghlich mayster,
On þe most on þe molde on mesure hyghe;
Fro þe swyre to þe swange so sware & so þik,
& his lyndes & his lymes longe & so grete,
Half etayn in erde I hope þat he were;
Bot mon most I algate mynn hym to bene,
& þat þe myriest in his muckel þat myzt ride;
For of bak & of brest al were his bodi sturne,
Bot[h] his wombe & his wast were worthily smale,
& alle his fetures folzande in forme þat he hade,
ful clene;

For wonder of his hwe men hade,
Set in his semblaunt sene;
He ferde as freke were fade,
& ouer-al enker grene. (ll. 136-50)

頭髮を長くのばし頭髯を茂みのように胸までたらし、人々には“lyzt”(l. 199)のよう
に輝しく見えた。“An aghlich mayster”とあり、かなりの巨人ではあるが体格は均
斉のとれた美丈夫で、外観上魁偉、奇怪という点を除けば代表的な中世騎士の姿で登場し

ている。“Etayn”の存在は OE 文学でも認められ、民間伝承の中に根強く生きていて古代ゲルマン民族神話に現われたものの陰影を僅かながらも止めているように思われる。人間に恐れられているように、陰気な、そして悪事を働くような性格が窺われる。この点は更に source と関連して後に述べられるであろう。GK は入って来ても誰に挨拶するでもなく昂然と辺りを見渡す。彼をびっくりして見詰める饗宴に侍る人達の眼差は、この騎士の肉体的な外観から更に細微にまで洗練された豪華な服装に移り、それから彼の跨っている馬にまで及ぶ。よく観察の行き届いた鋭い眼光である。この背後には作者の想像力が描き続けている image を見る眼の執拗な動きが写されているのは勿論のことである。

人々が最も怪異に感じ我々もそう思っ注意しなければならないのは、この騎士がその肉体も服装も、又その乗っている馬までもすべて草よりも鮮かな「緑」を帯びていることだ。彼に鮮明な意味を与えようとして作者は意識的にこの色を使っているのだ。次に重要な点はこの騎士が事を構えて王廷に乗りこんで来たのではなく、周知れ渡った King Arthur の円卓の騎士の名声を聞きつけて、平穩裡に腕競べの手合せをしようと、この場合特に “a crystemas gomen” (l. 283) のため訪れたことである。これは GK 自身も云うように武具に身をかためず、彼の手を持っている Christmastide に相応しい平和を示す “a holyn bobbe” (l. 206) と、もう一方の手にある大きな “an ax” (l. 208) にはっきり象徴されている。彼はアーサー王の騎士達をひやかしながら、最初の打撃を先に自分が受けるが、丁度一年後に返報の一撃を与えるという BG の提案をする。彼は挑戦者が出て来るのを待ち構える。

& runisch-ly his rede y3en he reled aboute,

Bende his bresed bro3ez, blycande grene,

Wayued his berde for to wayte quo-so wolde ryse. (ll. 304-6)

とうとうたまたま King Arthur 自ら進み出るが、万一を慮んばかって家臣が引留め、代りに Gawain がのりだして例の斧を受取り、彼と GK の間で改めて約束を結ぶ。Gawain は見事に GK の首を切り落すが、その騎士は奇妙にも死なず、

& nawþer faltered ne fel þe freke neuer þe helder,

Bot styþly he start forth vpon styf schonkes,

& ru[n]lyschly he razt out, þere as renkke3 stoden,

Lazt to his lufly hed, & lyft hit vp sone,

& syþen bo3ez to his blonk, þe brydel he cachchez,

Steppez in-to stel-bawe & strydez alofte,

& his hede by þe here in his honde haldeþ;

& as sadly þe segge hym in his sadel sette

As non vnhap had hym ayled, þaþ hedleþ h[e] we[re],

in stedde;

(ll. 430-439)

彼は血の滴る身体をよじり手に抱えた頭を持ち上げて、王后の方にその恐ろしい顔を向けて、

& hit lyfte vp þe yze-lyddeþ, & loked ful brode,

& meled þus much with his muthe,

(ll. 446-7)

自分が“þe knyzt of þe grene chapel” (l. 454)であることを明かし、約束通り探し求めて来るよう Gawain に要求してから頭を手に抱えたまま馬の蹄から火花を散らして、いずこへともなく立去る。王と Gawain はその騎士を嘲笑するが人々は全く不思議なことだと語り合った。このようないわば“enterludeþ” (l. 472)によって King Arthur の満足が得られ、酒宴が再開されるのであった。

さて Gawain は GK との約束を果たさねばならないので All Saints' Day の翌日、愛馬 Gringolet に乗って城をあとにし、GK を探し求める心楽しめ旅に出る。幾多の adventures を経て Christmas の前日、尊い翌日の勤行に出られないのではないかと心配して宿を与え給えと主の祈りとマリアの祈りを捧げたところ、突然森の中の開けた丘に二重の濠に囲れた城郭を目撃する。城主は客人の Gawain を丁重に迎えて款待する。Gawain が見るところでは城主は、

A hoge haþel for þe noneþ, & of hyghe eldee;

Brode, bryzt watþ his berde, & al beuer-hwed,

Sturne, stif on þe stryþþe on stal-worth schonkeþ,

Felle as þe fyre, & fre of hys speche;

& wel hym semed forsoþe, as þe segge þuþt,

To lede a lortschyp in lee of leudeþ ful gode. (ll. 844-849)

王妃 Guinevere よりも一段と美しい城主の奥方はいつも Gawain の傍に据って親しくもてなす。彼女と共にもう一人、威厳を保ち人々に敬意を払われている老婦人がいた。

Christmas の祝宴が終ると 12 月 29, 30, 31 日の 3 日間、城主は鹿狩、野猪狩、狐狩と続く狩猟に出掛け、城内に Gawain と奥方を残して行く。かくてこの作品の心臓部である Temptation Scenes と Hunting Scenes が交錯して象徴的に展開される。¹⁰⁾ 城主は Gawain とお互いにその日手に入れたものを夕方交換し合うという約束を結ん

で、この時 Gawain は自分の生命を惜んで契約を破って、green girdle を城主から隠した人間的な過失の故に、結末で打撃を受けることになる。Gawain が余りに challenge を気にしているので城主が彼の探求の目的を問いただすと、簡単無造作に緑の礼拝堂のある処を知っていると答えて Gawain の心配を打消し、饗宴を楽しませようとする。

11)
いよいよ元旦の朝早く、城主は一人の従者を案内者として付け Green Chapel に赴かせる。ある地点迄行くと従者は馬を止めて、Gawain が challenge をやめて難を避け、逃げのびよう忠告する。彼は GK を次のように描写する。

he is stiffe & sturne, & to strike louies,
& more he is þen any mon vpon myddelerde,
& his body bigger þen þe best fowre

pat ar in Arthureʒ hous, Hestor oþer oþer. (ll. 2099-2102)

近くを通る者は誰であれ何の見境もなく打ち殺してしまう “a mon methles” (l. 2106) の存在だと云う。彼に会えば生きて帰れないと、口をきわめて Gawain を説得する。しかし Gawain は従者の好意を謝しつつもただ一騎深い谷間に降りて行く。沸り立つ谿谷の流れの近くに大きな “a balʒ berʒ” (l. 2172) を認める。刃を研ぐ(ような)物音が聞え、岩伝いに Arthur's court に現われた時と全く同じ姿の GK が手に “A deneʒ ax” (l. 2223) を持って現われる。かくて約束通り GK は返しの一撃(三度打つが本当に Gawain の首を打つのは最後の一撃だけ)を Gawain に与える。そして二つの feign blows を含めた三度の打撃の意味を説明し、この打撃で彼は清められたと云い、GK は Christmas tide に彼を手厚くもてなした城主その人 “Bertilak de Hautdesert” (l. 2445)¹²⁾ であり、彼を誘惑したのは自分の妻で、自分が企らんだことを打明ける。この物語の締めくくりとして彼はこの challenge の動機、目的を述べる。すべては例の老婦人 “Morgne la Faye” (l. 2446), “þe goddes” (l. 2452)¹³⁾ の策謀で、円卓の騎士の名声の真偽のほどを確かめたのだと云う。

(II)

ここでこの見事な文学作品が突如闇の中から迷い出てきたものでないこと、そして作品の構成を考える場合中世の作家達の共通した創作態度を考慮するならば、その素材としているところの大部分を過去の遺産に負っていることを、明らかにしなければならない。しかしこの操作は SGGK を借物だらけだとする非難をもって陥しめるのではな

く、かえて逆にこの作品の優れていることを立証するのである。単なる魂の抜けたフランス物の翻訳にすぎないロマンスでないことがやがて示されよう。

Arthurian legend の源流が一般にケルトに求められる如く、BG の主題も又その¹⁴⁾源流、或はその最も早い現われをケルト神話の中に見出す。T の主題に較べれば BG の方がずっとはっきりした literary sources や analogues がたどれる。G. L. Kittredge がまとまった形で提出し、以後それに附加、訂正が加えられている。BG を取扱ったものとしては、最も古いアイルランドの物語と、13 世紀初頭に作られたフランスのロマンス 4 篇と高地ドイツのロマンス 1 篇とが挙げられる。¹⁵⁾SGGK の一面の素材を考えるために、以上の物語を必要なだけ順次取上げることとする。

最も古い既に文学的形態を整えたアイルランドの物語は 11 世紀末の写本に残されていて、その内容は更に 1 世紀遡るものとされる。BG は *Bricriu's Feast* 或は *Fled Bricrend* という epic の中に挿話として二つ保存され、その第一は *Bricriu's Feast* の last adventure になっている *The Champion's Bargain*、第二は “The Uath Version” と呼ばれる、前者より単純で古い形態を止めるものである。

¹⁷⁾ *The Champion's Bargain* の物語は——

ある時王 Conchobar をはじめとする Ulster の騎士達が都 Emain Macha の宮廷に集る。その晩 Cuchulinn、勝利の Conall、勝ち誇る Loegaire の三英雄だけは居ない。すると巨大で憎々しい *luchlach* (= ‘churl or herdsman’) が乗りこんで来る。古い獣皮を直かに着、黒い外衣を覆い、飛び出た恐ろしい黄色の服をしていた。左手に 20 対の牛が乗る block となる大枝を、右手には大きな斧を持っている。彼はこの宮廷の武勇、威厳を聞き伝えて訪れ、挑戦を申込む。Conchobar と Fergus mac Roig は予め除外され、今晚自分が先に相手の首を打ち、翌晩相手が自分の首を打つことを提案する。Munreमार mac Gerreind が進み出ると Duach は我々には首を元に戻す力がないと云ったため、上述とは逆の約束をし、先に斧を受取って block にのせた男の首を叩き切る。男はすぐに立上り切られた首、block、斧を抱えて立ち去る。辺り一面血の海で皆びっくりする。翌日その男は来るが Munreमार は逃出してしまふ。しかしその晩は Loegaire が居て挑戦に応ずるが、翌日彼も男を避けてどこかに行ってしまう。ついで Conall も出て来るが、同じく翌日は逃出してしまふ。四日目の夜男は激怒して訪れ、Ulster の騎士達は死を恐れていると非難す。その晩 Cuchulinn が居て進み出、斧で男の首を切り更にその首に一撃を加える。翌日男を避けることを勧められるが、恥辱を受ける位なら死んだ方がましだと云ってその夜男に会う。Cuchulinn は block の上に首をのせるが台が大きすぎるので更に首をのべしたところで、男は斧を振り上げ斧の背で彼の首を打つ。男は Cuchulinn の勇気を褒めたくえて立去る。この男は姿を変えた Curoi mac Daire であった。

¹⁸⁾ もう一つの “The Uath Version” は——

Cuchulinn、Loegaire、Conall の三英雄は誰が一番強いかに判定してもらうため、champion's portion を争って、Conchobar により Curoi の処に送られる。途中魔法の霧や巨人に襲われ、Cuchulinn のみがこれに打勝つ。Loegaire と Conall はこの判定に不満で、次に力が強く姿を自由に換えられる魔法使 Uath mac Imomain (= ‘Terror, the son of Great Fear’) の処に出掛けて行く。Uath の提案は自分の持っている斧を使い、まず相手が先に自分の首を切り、翌晩自分が相手の首を切るということだった。しかし Loegaire と

Connall はそれを拒否してしまい、Cuchulinn だけが行く。Uath は切られた首と斧を抱えて *loch* に消えて行く。翌日 Uath は石の上に身を横たえた Cuchulinn の首を斧の背で三回叩く。それでも Loegaire と Connall は不服なので再び Curoi の城塞に赴く。彼等は Curoi の妻 Blathnat (= 'Little Flower') に迎えられ、Curoi は各々交替で彼の戻って来る迄一晩ずつ城を守るようにと指示を与えて出掛ける。Blathnat は酒をすゝめ床の用意をする。Loegaire と Connall は巨人のため濫に投げこまれ、Cuchulinn が彼を倒す。

アイルランドの物語はいずれも Cuchulinn を主人公の英雄とし、その相手役を Curoi が務め彼が主人公の武勇を試みるものである。その試みも原始的な決闘形式で、交互に首を切る試合である。しかも首を切られた相手 (tester) が生きたまま落ちた自分の首を拾いあげて立去るのは随分 grotesque で奇妙な民話的な話であるが、これはそのまま BG の一要素として SGGK に再現されている。既に世代をかえてしまった次代の文学の中に過去の神話が新しい粧いに覆われて生き残っている。BG のみに SGGK の plot を限るならば、*The Champion's Bargain* に "The Uath Version" を附加すると、その類似した異様な雰囲気を含めて SGGK の原型、或はそれに最近似の作品が出来上ると考えてもいいだろう。

次にフランスのロマンスに移ると、もう既に ¹⁹⁾ Arthurian legend の装飾を施した立派な文学になっている。*Le Livre de Caradoc* は Chrétien de Troyes の死で未完作になった *Perceval, ou Conte del Graal* の後を継いだ The First Continuation, 所謂 Gawain Continuation の中に挿入された物語で、もともとは独立した物語と見做されている。

King Arthur は Carduel で Pentecost の宴を開き、諸方より家臣を呼び集める。その前夜王の grand-nephew に当る Caradoc を騎士に叙した。Kay が宴の開始を告げようとするが目新しい報せも来ておらず、不思議な出来事も起らないので、王は開会を拒む。すると黄褐色の馬に乗った背の高い騎士が乗りこんで来る。彼は長い白貂の外衣を纏い、長い剣を帯びて、恭々しく王に挨拶して「贈物」を求める。それはつまり騎士がその剣の一撃で自分の首を切られるが、一年後再会して相手の首を切るということだった。騎士達は馬鹿者のすることだと云って敢て挑戦しない。そこで彼等を非難して立去ろうとした時、Caradoc が進み出、一撃のもと相手の首を切り落す。すると騎士は自分の首を両手で掴んで肩の上にのせ、立上った。騎士は再会を約して立去る。皆彼の運命を悲しむが、Caradoc は元気に強い相手を求めて一年を過ごす。翌年再び Arthur's court が開かれ、みな集ると、例の騎士がやって来る。Caradoc は進み出て準備をする。王は身代金を出してやめさせようとするが、騎士は断わる。彼が首をのぼし騎士が剣を振り上げた時、后が出て来て、彼の命乞いをするが断わられる。かくて騎士は剣の平で軽く彼を叩く。彼を勇気のある誠実な騎士だと褒めたうえ、傍に呼んで自分はお前の父で、魔法使 Elhavres になっているのだと説明するが、Caradoc は信じない。騎士は立去る。

主人公は Caradoc、相手の騎士はアイルランドの物語に出て来た野卑な、見るからに恐ろしい巨人に較べると、ずっと洗練された文明の下に生きる騎士になりかわり、原始的な斧も長い剣に変っている。BG は Arthur's court で一年の間をおいて行われ、終ってから騎士が主人公の父であることを打明ける。

散文ロマンスの *Perlesvaus* は――

Lancelot は荒廃した国を彷徨してある市に来る。人も無く、壁や門は崩れている。美しい古い宮殿の前で馬を止めると、人々の歓きの声が聞える。間もなく若いきれいな騎士が内部から降りて来る。彼は立派な身装で金の首飾をつけ、手には大きな斧を持ち、Lancelot が声をかけると有無を云わず、私がこの斧で汝の首を切るか、それとも私の首を切り更に仕返しを受けるため一年後戻ってくるかと云う。彼は断わることもならず第二の道を選ぶ。騎士は跪き、出来るだけ首をのぼす。一撃でその首を切ってしまう。Lancelot は斧を投げだし馬に乗って振り返ると、騎士の体も首も見えない。諸国を武者修行して、一年後再訪する。女の泣声が聞えるがどこに居るのかわからない。宮殿で馬を降りると、砥石で研いだばかりの大きな斧を持った、背の高いきれいな騎士が内から降りて来る。騎士は約束を述べ、Lancelot が殺したのは自分の兄だと云い、首切りの準備をするように命ずる。Lancelot は跪いて首をのぼし、斧が振りおろされた時身をかわしてしまう。兄はそんな事をしなかった、じっとしていよと非難する。二人の乙女が窓辺に現われ、その一人が命乞いをする。騎士は斧を投げ出して彼の許しを乞う。Lancelot が約束を守ったため、この市に再び人が住むようになる。

主人公は名高き Lancelot、その相手は野蛮な男でなく立派な服装をした若い騎士である。SGGK とは大分違った要素を持っているが、BG の斧と、Lancelot が返報の一撃を受ける件りは、かなりの類似性が認められる。其他の *Païen de Maisières* 作²¹⁾ *La Mule sans Frein*, *Hunbaut* と *Heinrich von dem Tûrin* 作²²⁾ *Diu Crône* は主人公を Gawain にしているが、SGGK とは相当の隔りのある、魔術のかかった国の魅る物語である。しかし Gawain の相手役、*jusarme* を持ち、黒くて背の高く恐ろしい *vilain* の古風な姿と、*jeu parti* としての BG をする部分とに共通点が見出される。

(III)

今迄の source 研究により、SGGK が過去の諸作品に多くを負っていることは明白であり、このことは又このまじきことであった。Plot は SGGK が成立する迄にほとんど揃っていたと云えよう。中世の文学は読まれるよりも聴かれることが主であった。聴衆は、よく知っている物語が次々に語られて行くのを、ありそうな話になるのを期待しつつ楽しげにききほれるのである。時代は遠い昔に置かれるが、登場人物は今に生きている。色々の物語の構成は作者の才幹に委ねられる。中世の *artifice* は過去の遺産を尊重するから創案することはないが、過去の材料を作者の条件に従って利用し、色々²⁴⁾に作りかえ組合わせて整理し、新たな作品を作り出して行く。

SGGK と同類の作品を比較した時、最も顕著な事は SGGK における “green” の強調である。半巨人の立派な騎士を見ると、人々はその緑の鮮かさに驚嘆して “fan-

toum & fayryze” (1.240) かと思う。物語の主人公 Gawain の対立者に *Green Knight* を持ち出したのは *SGGK* だけであって、他の同類の物語にはない。GK の Irish prototype に当る Curoi は ‘the man in the grey mantle’ (*brat lachtna* or *odar*) と呼ばれている²⁵⁾。他の物語でも GK に相当する者は黒か灰色の服装をしていることが多い。他の場合に使われているのだが、ケルト語の形容詞 *glas* は *grey* と *green* の二つの意味を持った曖昧な語で、これが誤りとられたのだと R. S. Loomis は主張する²⁶⁾。この点は source にないだけ色々の説が立てられている。今世紀の初頭では J. G. Frazer や W. Mannhardt の影響で、vegetation ritual or myth を重視し GK を自然神、植物神の後裔²⁷⁾ としてその supernatural element を考慮しつつ、緑は vegetation spirit or demon とする。自然の豊饒を表わすと共に、冬を越し春を迎える再生の喜びをみとめる。Folklore をとるならば、GK の漠然たる model を中世の executioner の幻に見、緑はアイルランド *s’de* の色で死者や死を示す本質的に不幸なものとし、ghost を表わすもの²⁸⁾ だとする。又 Green Squire とか Green Count と、²⁹⁾ 実在の model に附合するものを求める人達もある。Source には緑の言及がないので、多分 *SGGK* の作者か、或はその French original の作者がどこから異種³⁰⁾ の材料を取上げて緑の symbol を強調し、*SGGK* に Arthurian legend の源にある雰囲気を出させる或るアクセントを加えたものであろう。GK の住処を

He[re] myzt aboute myd-nyzt

pe dele his matynnes telle.

(ll. 2187-2188)

と描写しているだけに、緑を単純に faery の色と解し、GK に人間とは異った要素を明確化し、異様な不安気な背景を設定しようとしているのだと考えられる。

次に重要な点は、Green Knight は BG の場面では超人的な GK として現われ、一方自分の城中では Huntsman Host として見事な中世人になっている、この性格の二重性である。本来 supernatural being である GK がすっかり人間化して、一方の城主と密接に結合していることである。Literary source のアイルランドの epic では GK に相当する、太陽神と嵐神の神話的性質のある Curoi が、太陽神 Lug の子、英雄 Cuchulinn の武勇を試すため、恐ろしい巨人に姿を変えて現われる。フランスのロマンスでは *Caradoc* はこのアイルランド物語に類似して、tester は長い剣を帯び洗練された中世騎士になり変わり、野卑な性質が消えているが、主人公 *Caradoc* の knightly virtue を試す役割を演じている。しかし他のロマンスでは BG はそれ自体の存在理由を持たず、多く主人公の訪れて行く処に纏る不幸の源の enchantment を取去るた

め、主人公がその *adventure* をなす資格があるかどうかを試される手段となっている。従って前者の群と後者の群とは自ずと物語の性質が異っている。*SGGK* の原作者はこの作品を作るに当って、素材の一つとして類型的な *tale of disenchantment* を一応考慮に入れたかも知れない。³²⁾しかし *SGGK* ではその要素が認められない。作者は本来 *disenchantment* のない物語を素材としたのか、或は BG を人間的要素の濃厚な T と結合するため構成上その部分を切り落してしまったのだろうか。

SGGK は素材の源に関することは別にして、*myth* ではなく *romance* である。つまり人間的色彩が圧倒的な、同時代的性質の強い物語になっているのだ。GK は異様な「緑」で騎士達を驚かしはしたもののただそれだけであって、其他の点では常人とさしてかわらないので彼等はあまりこわがらない。優雅で調和のとれた *Arthur's court* と対照的な、生々とした野性味のある GK 自体、一面では大言壮語しながらも、一応人間としての道を弁えた立派な中世騎士になりきっている。物語の最後で GK が自分を明かす時、この試練の由来をすべて *Morgan la Fay* にあるとしているが、³³⁾それも物語構成の *rationalization* のためにする説明にすぎないように見受けられる。事実、作中に現われたところでは *magic* の要素は非常に弱いし、*Morgan* は城中の威厳ある老婦人として、もう一人の若くて美しい城主奥方 (*temptress*) を浮彫りする影の人程度の地味な働きしかしていない。³⁴⁾しかしながら、*magic* はやはり物語を支える重要な道具の一つであり、作者はそれを余り強調することなく当り前のように使用して、自然と超自然を巧みに同一の平面に置き、*fiction* をありそうな話として聴衆に不安な状態をかき立てている。作品中兎に角当の *Morgan* の重要性が指摘されている以上、或は、作者の皮肉な眼差を多少感じながらも、作品は伝統的な物語に負っているのであるから、聴衆は自らの *Arthurian legend* の知識によって、作中に述べられてない不足分を補わねばならないのかもしれない。

GK は Camelot の *Arthur's court* で自分の首が切られる時と、自分の住む *Green Chapel* で *Gawain* に返報する時だけ GK となる。T の艶かしい主題を掲げた城中では、城主として *humour* のある普通の人間である。この部分は BG の中に挿入された構成で、考えようによっては、結びの BG を前にしてその予備のテストを自分の妻を使って主人公に験したものとみられる。GK は緑の騎士の仮面 (*persona*) を持った自分に対し警戒心を持たれぬよう、又自分の行動に不自然さが現われぬよう、獲物の交換で *Gawain* をからかいながら、城主として自分に課された役割を自然に演じている。*Adventure* をする時には自分の意志で自分の姿をかえ、華やかな城中では普通の人間

になる。Source の違う二つの主題があわさった形なので、GK がこの性格の本来の姿なのか、それとも Bercilak がそうなのか速断は出来ないにしても、全体としては後者に主たる力点がおかれているようである。本来の disenchantment の物語なら、GK に相当する者は、BG によって元の姿に戻る迄 enchantment のかかった奇怪な姿を保ち、同時に自分の姿を元の人間に戻そうと出来る限り色々の手段を尽して懸命になるのであるが、SGGK にはそういうところがない。むしろ Gawain の virtue をためす者になっている。そのため GK と Huntsman Host とに自分を交互に変えている (a shape-shifter)。そして城主の人間性に引かずられてそれと調和すべく、超自然的要素の多かった GK は人間的色彩の濃いものになろうとしているのである。

Huntsman Host は T の主題を内蔵して SGGK にもたらされたもので、現実²⁵⁾に当時の典型的な地方豪族を髣髴させるが、これといわば Janus の顔の如く表裏の関係で結付いた GK には、これ迄述べて来たところで明らかなように、ほとんど人間化したとは云えその素材としたものの過去の幻影をかなり留め、要素としても超自然の古い面が新しい romantic な部分と調和を保っている。

冒頭と締め括りに定石の chronicle passages を持って来て、もともと Arthur's court と関係のない物語をロマンスとして色々飾り立て、フランスでは最盛期をすぎた正統な Arthurian legend の枠内にはめこんで上手に纏めあげている。Wales に近い荒涼とした地方と、冬の祭の Christmastide を背景にし、古い根強い伝統をもった表現形式を使って一際優れた意識的な洗練された技巧を操り、伝統的な物語群を、おきまりの setting ながらも人々の喜びそうなものを悉く揃え、すべての要素を Sir Gawain の test という方向へ統一し、一つの纏りある romance として提出している。副次的な要素は極力短く縮め、作者独特の視覚的造形の描写で、必要なところを重点的に、しかも drama のように盛り上げて語って行く才能は見事という外はない。Literary meaning を辿って行くだけでも充ち足りる作品であるが、それと同時に作者が盛んに言及している宗教的要素や女性蔑視のファブリオの表現に留意しながら moral meaning²⁶⁾ を辿り、二大テーマの意味を噛みしめることも可能である。人間の行為の理想像は主人公の中世騎士の鑑 Gawain に体现され、彼は聖母マリアの騎士として慎重に行動するが、その背後は人間のあらゆる行為は神に直接つながるという確固たるキリスト教信仰によって裏打ちされている。つまり secular な人をも、religious な人をも夫々違った phase において充分引きつけるだけの魅力ある作品と云えよう。Fictitious

narrative として今日の小説的内容を持っているにしても、このような圧縮された密度の高い drama を表現するには、やはり、「詩」を必要とするであろう。そしてこの作品が傑作である所以は、結局、自然と人為的なものが、そして wildness と courtliness が、その宗教性の揺ぎなき安定と同じように、完全な平衡を平和に保っていたからである。

註

- 1) Dorothy Everett, *Essays on Middle English Literature*, Oxford, 1955, p. 68. SGGK 論 (pp. 74-85) は技巧を主にした考察として貴重である。
- 2) F. Madden (ed.), *Syr Gawayne*, for the Bannatyne Club, London, 1839.
- 3) G. Paris, *Histoire littéraire de la France*, XXX, pp. 71-8, 1888.
- 4) J. R. R. Tolkien & E. V. Gordon (ed.), *Sir Gawain and The Green Knight*, Oxford, 1925 及び Sir Israel Gollancz (ed.), *Sir Gawain and The Green Knight* (with Introductory Essays by Mabel Day and Mary S. Serjeantson), EETS. OS. No. 210, London, 1940. 拙論での引用はすべて後者の版 (1950) に拠る。
- 5) George Lyman Kittredge, *A Study of Gawain and The Green Knight*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1916, pp. 3-143. J. E. Wells, *A Manual of the Writings in Middle English*, Yale Univ. Press, 1916, pp. 54-57. Tolkien and Gordon, *op. cit.*, Introduction, pp. xi-xv. M. Day, *op. cit.*, Introduction, pp. xx-xxxix. Laura Hibbard Loomis, Chap. 39 "Gawain and The Green Knight" (*Arthurian Literature in the Middle Ages, A Collaborative History*, ed. by R. S. Loomis, Oxford, 1959), pp. 530-537.
- 6) M. Day, *op. cit.*, pp. xx-xxi and xxxv. L. H. Loomis, *op. cit.*, pp. 536-37.
- 7) M. Day, *op. cit.*, p. xxi. D. Everett, *op. cit.*, pp. 76-77.
- 8) R. M. Garrett, "The Lay of GKG," *JEGP* xxiv (1925), pp. 125-34.
- 9) D. Everett, *op. cit.*, p. 82. E・トンヌラ, G・ロート, F・ギラン (清水茂訳) 「ゲルマンの神話」東京, 1960, pp. 100-106.
- 10) Henry Lyttleton Savage, *The Gawain-Poet*, Chapel Hill, 1956, II. "Symbolism and Allegory in SGGK," pp. 31-48.
- 11) 従者を GK の化身と考える人達がある。M. Day, *op. cit.*, p. xxxvi. J. L. Rosenberg (tr.), *SGGK with Introduction by James R. Kreuzer*, *Rinehart Editions*, 1959, p. xxxi.
- 12) Arthurian legend にはこれと同一人物はいない。この名前の origin を L. S. Loomis は *bachlach* の corruption に, J. R. Hulbert は the Vulgate romances 中の *Bertolais* に求める。L. S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes*, New York, 1949, Chapter LXXII "The Guingambresil

- Episode,” p. 420. J. R. Hulbert, “The Name of the Green Knight,” (*The Manly Anniversary Studies in Language and Literature*, Chicago, 1923), pp. 12-19.
- 13) Tolkien & Gordon, *op. cit.*, Notes, pp. 115-16. R. S. Loomis, “Morgain la Fée and the Celtic Goddesses,” *Speculum*, xx (1945), pp. 183-203. (これは後に *Wales and the Arthurian Legend*, Cardiff, 1956. に収録される)
- 14) ケルトか否かは今日アーサー学の根本問題の一つであり、二派に別れて長く論争が続けられている。否定説はそれを決定的に裏付ける文学作品の存在しないことにあるが、私見としては、Loomis 派の source 研究の成果と相俟って、多くの作品が才月と共に永遠に消失してしまった事実、我々は version を text として接していること及び記録としては殆んど残存しない口承文学の存在等を考える時、ケルトとの結付きを認めてもよいと思う。世代として epic の世界から romance のそれへと移行して行く過程の背景、古くなりつつあるものから後に役立つ必要な養分を引出して行き、変態をとげる状況を考慮すべきである。
- 15) G. Paris, *op. cit.* J. D. Bruce, *The Evolution of Arthurian Romance From the Beginnings Down to the Year 1300*, 2 vols., 1928² (reprinted 1958), Gloucester, Mass., Vol. I, pp. 88-89. Kittredge, *op. cit.*, pp. 9-76. Alice Buchanan, “The Irish Framework of GKG,” *PMLA* xlvii (1932), pp. 315-38. Jean Marx, *La Légende arthurienne et le graal*, Paris, 1952, pp. 288-94.
- 16) ケルトの物語がフランスに伝えられたとみられるが、その伝達の事情は具体的に証明することは出来ない。最近の R.S. Loomis はアイルランドのものだけで説明する立場から、両者の中間にウェールズを考慮する立場に移って来ている。“More Celtic Elements in GKG,” *JEGP* xlii (1942), pp. 149-84.
- 17) G.L. Kittredge, *op. cit.*, pp. 10-14. Sources 相互間の細かい比較は Kittredge を参照されたい。M. Day, *op. cit.*, p. xxii.
- 18) Kittredge, *op. cit.*, pp. 17-18. M. Day, *op. cit.*, pp. xxi-xxii. A. Buchanan, *op. cit.*, pp. 317-25. 彼女はこれを “The Yellow and Terror Version” と呼び、主たる source とし、更に *Curoi's Castle* 及び *Death of Curoi* を取上げ、総計 31 項目の類似点を指摘し、SGKG の全貌はアイルランドの物語にすべてあるとした。
- 19) Kittredge, *op. cit.*, pp. 26-38. M. Day, *op. cit.*, pp. xxii-xxiii. A. W. Thompson, Chap. 17 “Additions to Chrétien’s *Perceval*—Prologues and Continuations,” *op. cit.*, pp. 212-14.
- 20) Kittredge, *op. cit.*, pp. 52-61. M. Day, *op. cit.*, p. xxiii. W. A. Nitze, Chap. 20 “*Perlesvaus*,” *op. cit.*, pp. 263-73.
- 21) Kittredge, *op. cit.*, pp. 42-53. M. Day, *op. cit.*, pp. xxiii-xxiv. A. Micha,

- Chap. 28 "Miscellaneous French Romances in Verse," *op. cit.*, pp. 362-3.
- 22) Kittredge, *op. cit.*, pp. 61-66. M. Day, *op. cit.*, pp. xxiii-xxiv. A. Micha, *op. cit.*, pp. 369-70.
- 23) Kittredge, *op. cit.*, p. 51. M. Day, *op. cit.*, pp. xxiii-xxiv. H. Sparnaay, Chap. 33 "Hartmann von Aue and His Successors," *op. cit.*, pp. 440-1.
- 24) R.S. Loomis, *op. cit.*, Chap. V, pp. 38-58. E. Vinaver (ed.), *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols., Oxford, 1947, Vol. I, Introduction. H. J. Chaytor, *From Script to Print*, Cambridge, 1945; 2nd impression, 1950. George Kane, *Middle English Literature*, Part I, pp. 1-103. D. Everett, *op. cit.*, pp. 1-22.
- 25) A. Buchanan, *op. cit.*, pp. 327-30. R. S. Loomis, *op. cit.*, Chap. XLVII, pp. 278-285.
- 26) R. S. Loomis, *op. cit.*, p. 279, n. 7. L. H. Loomis, *op. cit.*, p. 532, n. 5.
- 27) E. K. Chambers, *The Mediaeval Stage*, 2 vols., Oxford, 1903, Vol. I, p. 186. W.A. Nitze, "Is the Green Knight Story a Vegetation Myth?" *MP* xxxiii (1936), pp. 351-66. Kittredge, *op. cit.*, pp. 195-99. John Speirs, *Medieval English Poetry*, London, 1957, pp. 215-51. Robert Graves, *The White Goddess*, London, 1948, pp. 178-9. E. Pons, *Sire Gauvain et le Chevalier Vert*, Paris, 1946, pp. 76-78.
- 28) A. H. Krappe, "Who was the Green Knight?" *Speculum* xiii (1938), pp. 206-15.
- 29) Haldeen Braddy, "Sir Gawain and Ralph Holmes the Green Knight," *MLN* lxvii (1952), pp. 240-2. J.R.L. Highfield, "The Green Squire," *MÆ* xxii (1953), pp. 18-23.
- 30) R.T.O. d'Ardenne, "The Green Count and *SGGK*" *RES* x (1959), pp. 113-26.
- 31) *SGGK*, l. 681 "an aluisch mon" 参照。
- 32) BG の origin については Kittredge, *op. cit.*, pp. 147-194 and 200-217. J. Marx, *op. cit.*, p. 291.
- 33) Morgan la Fay の新しい見方については Denver E. Baughan, "The Role of Morgan le Fay in *SGGK*," *ELH* xvii (1950), pp. 241-51, 特に Albert B. Friedman, "Morgan le Fay in *SGGK*," *Speculum* xxxv (1960), pp. 260-74.
- 34) *SGGK*, ll. 947-80.
- 35) 註 29, 30 及び H.L. Savage, *op. cit.*, pp. 49-119.
- 36) M. Day, *op. cit.*, pp. xx-xxxix. D. Everett, *op. cit.*, pp. 76-7. 特に Day は "moral" の面を強調するが, これは Gawain-poet の他の作品, *Pearl*, *Patience*, *Cleanness* に自ずと結付いて行く。